

SVC063-P32

会場:コンベンションホール

時間: 5月25日17:15-18:45

愛鷹山山中で確認された火砕丘状の地形

Pyroclastic cone on southwestern flank of Ashitaka Volcano

岸本 博志^{1*}, 鈴木 雄介¹, 千葉 達朗¹, 小川 紀一朗¹, 土屋 郁夫², 永井 健二², 三輪 賢志²

Hiroshi Kishimoto^{1*}, Yusuke Suzuki¹, Tatsuro Chiba¹, Kiichiro Ogawa¹, Ikuo Tsuchiya²,
Kenji Nagai², Kenji Miwa²

¹アジア航測株式会社, ²国土交通省 富士砂防事務所

¹Asia Air Survey Co., Ltd., ²Ministry of Land, Infrastructure, Transp

平成13年から検討が開始された富士山ハザードマップでは、ハザードマップへの最新の知見の取り込みを目的とし、富士山全域において組織的な火山調査が行われ、多くの成果が得られている。

著者らは、富士山周辺の航空レーザー計測データから赤色立体地図を作成し、地形判読を行った。また、判読結果を確認する目的で、現地踏査および試料分析を行なった。その結果、富士山およびその周辺の火山噴火に関する多くの新知見の存在が示唆された。本発表では、そのうち愛鷹山内で発見された火砕丘状の地形について報告する。

愛鷹山は約10万年前に活動を停止した古い火山と考えられている。一方、赤色立体地図を用いた地形判読では、愛鷹山山中の、赤淵川上流付近に比較的新しい火砕丘状の地形が認められた。現地踏査では、火砕丘状の地形を構成する堆積物として、赤色酸化したスコリアや火山弾が確認された。これらは、典型的な火口近傍堆積物といえる。周辺には、他の火砕丘は認められないため、これらの火口近傍堆積物は、当該地形から噴出したものである可能性が高い。

また、この堆積物の上位には、120cmの土壌層が発達する。土壌層から広域テフラを検出するため、火砕丘から噴出したスコリア層の上位で、10cmごとに連続して試料採取を行った。そのうち、表層部を除く深度20cmから120cmまでの10層準について、含まれる火山ガラスの形態分類および屈折率の測定を実施した。その結果、深度80cm~90cmの層準において、鬼界アカホヤ火山灰(約7300年前)が検出された。このことから、この火砕丘の活動年代は、少なくとも約7300年前より古いということがあきらかとなった。

この火砕丘が富士山に関連した活動であった場合には、富士山の側火山の南端となる。また、愛鷹山に関連した活動であった場合、10万年間に活動終了した愛鷹山の中で、最も新しい火口のひとつであると考えられる。いずれの場合であっても、周辺地域の火山防災上重要な事項である。本発表では、岩石学的なデータとあわせて、この火砕丘の活動について検討を行う。

キーワード:火山防災,火山地形,火山砂防,富士火山,愛鷹火山

Keywords: volcanic disaster prevention